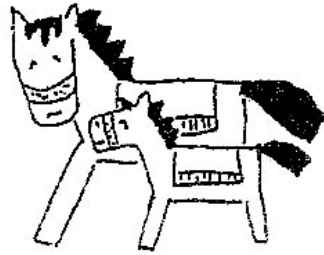


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

令和2年 3月 NO.304



〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		3月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
3月 6日 13日	金	うたうたい「カラヴィンカ」 18:00～20:00	春らしく「花の街」「花」「ペチカ」「浜千島」 などなつかしい歌を練習しています。 となたでもどうぞおいで下さい。
3月 7日 21日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスにはいって いっしょにあそびましょう。
3月 7日	土	おとなアート 14:00～16:00	ボードの上に木の葉を置き、 余白の形を感じながら制作する アナログ画に挑戦します。
3月 10日	火	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	「コスモス文庫」も穴吹ビル2階へ引っ越し します。お手伝いおねがいします。
3月 13日	金	おはなしの会 10:00～12:00	「春をかんじて!」をテーマに 大型絵本や手あそび、わらべうたなど 楽しいことがいっぱいです。
3月 18日	水	育児・健康相談 14:30～15:30	園医師(小児科医)にゆっくり 相談できます。(予約要)

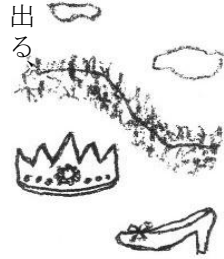
・火～土の9:00～18:00までは、園内開放して
いますので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談(月～土) 9:00～18:00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活
入園・見学についての相談もどうぞ。



金子みすゞ全集⑥
「さみしい王女・下」より

丘で
あたまの上には青い空、
足の下には青い草。
お伽噺(ときばなし)にいつも出る
王女の姿はうつくしい。
けれども黄金(きん)の冠は、
青い空よりちいさいし、
きれいな黄金のあの靴も、
青い草よりかたいだろ。
あたまの上には青い空、
足の下には青い草。
もっときれいな私こそ、
丘に立ってる私こそ、
もっときれいな王女さま。



☆今月の内容 — ゴール見えない子育て ～就職つまずき自立できず～
子どもの貧困 就学援助 自治体間で格差



ゴール見えない子育て

～就職つまずき自立できず～

定年前後の人たちにとって、「就職しない・できない」子どもの存在は大きな悩みだ。

大阪府の商社で働く男性(58)の長男(27)は、私立大を卒業後、業績を伸ばしていた自動車部品メーカーに新卒で就職した。男性が一安心したのもつかの間、5か月ほどで離職。その後、専門学校で調理師免許を取得し、飲食店に正社員として採用されたがやはり長続きせず、次の職場もすぐに辞めてしまった。

「努力や我慢が足りないんじゃないか」。長男に詰め寄ったこともあるが、真面目でおとなしい長男は「人間関係でつまずく」と肩を落とすだけ。「我々の頃は誰もが苦勞せず就職し、その後は滅私奉公で退職するまで働いた。それが当たり前とっていたが…」と男性は話す。

長男への出費は、専門学校の学費や生活費など大学卒業後も数百万に及ぶ。専業主婦だった妻も最近、パートに出始めた。男性は言う。「一番傷ついているのは息子。とにかく私は定年後も働き続けるだけです」

子どもに教育さえ受けさせればやがて就職、結婚し家を出て行く。こうした典型的な生き方を体現してきた親世代は、子どもたちにも同じ生き方を期待する。しかし、就職につまずき、自立できない子どもは多い。

総務省統計研修所によると、親と同居する20～34歳の未婚者数は1035万人で、その完全失業率は8.2%(2012年)。20～34歳全体の完全失業率に比べ高い傾向にある。35歳～44歳では、この傾向はさらに顕著だ。

「こうした子を抱え、こんなはずじゃなかった、どうしていいか分からない、と孤立する親は多い」と指摘するのは一般社団法人「キャリアブリッジ」理事長の白砂^{しろまさ}明子さん。同法人は、国の認定事業「とよなか若者サポートステーション」を運営。就職できない18～39歳の約150人に就労支援や相談事業を行

っている。

「対人業務を重視する今の社会では、いくら手先が器用でも高い対人能力が備わっていなければはじかれてしまう。親世代が体験したことのないような、生きづらい社会になっている」と白砂さん。

子どもが直面している就職戦線の厳しさや実情を知りたいという親に最近人気なのが、保護者向けの「就活セミナー」だ。新卒者の親だけでなく、既卒者の親も多い。「東京しごとセンター」も今夏、初めて開催した。

放送大学教授(家族社会学)の宮本みち子さんは、「親は自立できない子どもに『これは仮の姿。いつかはこの子も…』と期待し、食事などの世話を焼き続ける。これでは親もストレスがたまってしまう」と指摘。同居の場合は子どもの収入額にかかわらず、「共同生活者」として家事の分担や生活費の支払いなど、一定の役割や責任を求めるべきだという。そこから大人としての自覚が芽生えるからだ。

「親子で『仕事が見つからない』と周囲に助けを求めてほしい。人脈や公的機関をフル活用し、まずは親も子も自ら行動を起こすことが大事だ。あきらめずに知恵を絞って」と話している。

子どもの貧困 就学援助 自治体間で格差

「ほかの部活じゃだめなの？」

埼玉県の市部に住む女性(34)は昨年4月、中学校に入学した長男(13)にかけた言葉を思うと、つらくなる。

長男が入部を希望した剣道部は、防具や竹刀など一式をそろえると、5万円以上かかる。

しかし、夫が病気で休職し、毎月の収入が10万円余りに激減したため、とても払える金額ではなかった。

市から受けている就学援助では、クラブ活動費は対象外だった。文部科学省は2010年、就学援助の支給基準にクラブ活動費、生徒会費、PTA会費の3

項目を加えたが、実際に支給する項目や金額は、各区市町村教委が決めている。

社会福祉の専門家らが参加する「『なくそう！子どもの貧困』全国ネットワーク」が11～12年に全国200自治体から回答を得たサンプル調査では、3項目を支給対象にしていたのはいずれも1割程度だった。

長男は剣道をやめた友人からお古の防具を譲り受け、剣道部に入れたが、一度に1万数千円かかる合宿費や大会参加費などが家計に重くのしかかる。

「授業で使う教材や、体操着、上履きの買い替えの費用などもばかにならない。お金のかかる運動部や吹奏楽部への入部をあきらめる子も多いのではない。子どもの選択の幅が少しでも広がるように援助を充実していただけたら」と女性は話す。

文科省の調査では、就学援助を受ける小中学生は不況下で増加傾向が続き、11年度は全体の15.6%にあたる約156万7000人に上った。

しかし、地域の経済状況に加え、自治体によって援助が受けられる世帯の所得額や申請の手続き、制度の周知度などに差があり、援助を受けた小中学生の割合は、都道府県別では最多の大阪府(27.4%)と最小の静岡県(6%)で20ポイント以上の開きがある。

支給項目も、体操着から眼鏡まで含める自治体がある一方、財政的な事情で学用品費などの支給額を文科省の基準の半額に抑えるところも出ている。

小中学校などの学校事務職員でつくる「全国学校事務職員制度研究会」の植松直人事務局長は「自治体間で援助に格差が生じるのは望ましくない。公教育の場では、家庭の私費負担がなるべく大きくなならないような配慮が必要だ」と訴える。

東京都府中市のように、「私費負担の軽減」を小中学校に通知し、授業で使う副読本やワークテストなどは原則、「公費負担」としている例もあるという。

